

飛騨漆の森プロジェクト

HIDA Urushinomori Project

語り手 本母雅博

聞き手 山本真紀

企画 高山市

取材日: 令和6年11月26日

飛騨産業一筋

高山市の総和町2丁目で生まれました。県立斐太実業高等学校の木材工芸科を卒業してから、飛騨産業に就職しました。長男ということもあって、地元就職です。その頃、ほとんどの卒業生は、愛知県とか岐阜のほうに就職したので、地元で就職したのは、俺一人だったよ。最終的には、ほとんどが高山に戻ってきたけどな。飛騨産業には、高校を卒業してから2023年12月まで勤続したので、通算59年働きました。半世紀以上働きました。飛騨産業一筋です。

もともとは技術系の研究とか商品開発をしておったけれども、2000年に現会長の岡田賛三さんが社長に就任された時に取締役になり、取締役の一人として、改革の最前線に立ち、改革・改善意識の強い仲間とともに現在の飛騨産業の基盤づくりを実践してきました。

飛騨の匠のDNA

飛騨の家具のブランド力をもっと高めていくために、どんなことをするべきか、何をやるべきか、伝統産業に端を発した家具づくりを、連続と続けていくにはどうするべきかといった時に、まず過去を振り返って、過去の大事なものを引き継いで理解する。やっぱり歴史とか文化はものすごく大事だと思う。飛騨で作ったものは良いものですよと言える背景があるかどうかを考えた時、やっぱり飛騨の匠に注目しました。

その昔、高山で飛騨の匠の伝統がどう伝えられてきたのかを調べると、いろんな書物に「飛鳥、平安の時代、約1300年前から、飛騨の匠たちは京へ上って都を作る、派遣する」と書いてある。昔の歴史書には、「飛騨は貧しい国なので、税金の代わりに労働力を求める」と書いてあるのよ。でも俺は、その考えはおかしいと思った。どうしてかということ、日本書紀の中に、飛騨のことに触れてある。要約すると、飛騨から税を免除する代わりに、匠たちを里ごとに10人ずつ出しなさいということが書いてあるのよ。法律を作ってまで、匠を派遣しなさいって定めたのは、飛騨だけなのよ。これは、法律に定めてまで「都づくりのため、飛騨からの職人を求めた」というように解釈すべきじゃないかなと思うんです。

昔の都がどういうふうに変遷したかをずっとみてくると、ものすごい勢いで都が変わっていったんだよな。奈良であったり、京都であったり、奈良の中でも飛鳥にあたり、平城のほうにあたり。天皇が変わるたびに、いろんなところに都が変わっていった。そうすると、数年のうちに都を作らないといけなわけですね。ということは、建物の建て方の知識を含め、いろんな技を持った職人たちがいないとできないわけだ。宝玉を飾らんでも、都を作ることによって、権力を見せることができる。つまり象徴的になれるわけです。そうすると優秀な職人がいる。そのため、飛騨の人々、特に飛騨の匠たちの技をどうしても必要とした。それほど優秀な職人たちのDNAを引き継いできた我々だ



本母 雅博

昭和21年9月16日生

プロフィール

昭和39年4月 飛騨産業入社

令和5年12月 飛騨産業退社

通算59年8ヶ月勤務

(平成30年、飛騨産業は創業100年を迎えた)

令和4年3月 任意団体「飛騨漆の森プロジェクト」発足
会長に就任

令和5年12月 NPO法人に改組 理事長に就任

飛騨木工連合会「飛騨の匠学会」理事・研究員

からこそ、高山でいろんなものづくり文化が発達したんだと思います。

このように、貧しいから派遣されたのではなく、高い技術が必要としたから派遣されたと記述を訂正してもらうように、我々が働きかけました。今は訂正されているはずです。図書館などに行って調べてもらえばわかるけども、我々が動く前の記述は全部貧しいからって書いてあったんです。

歴史に基づくブランディング

もう一つの裏付けは、高山には、古代にもたくさんの神社仏閣が建っていたわけよ。それだけの建築ができる財力と強い信仰心が、飛騨にもあったってことだよな。樹木はもちろんあるけども、財力だけじゃできないですよ。人もいなきゃ、神社仏閣は建たんわけよ。この事実だけでも一般的に言われておったこととの違いがわかるのよ。昔は米もあったけども、だいたい山が近くにあるので、たくさんの食べ物が手に入るのよな。山菜でもきのこでも。だから貧しくはなかった国だったと推測できる。

高山には、歴史の中に、ものづくり文化や、他の地域よりも優れた伝統があるんやと再認識できる。そういう根拠のちゃんとした経緯や、他の地域と違うことを武器として打ち出してブランドを作るんです。どこのブランドでもさ、歴史と文化を大事にしてるやろ。実際、ブランドが成功するところはそう。ブランディングが成功するのは、もともと根付いたものがあって、さらにそれをプッシュしていく感じなんだよね。

小学校とかで、飛騨の匠について話をしてくださいという依頼がありますが、いろんな事例を挙げて、我々はふるさとを大事にしよう、飛騨を大事にしよう、飛騨の人であることを誇りに思っ^て頑張ろうねって話をするわけです。

少なくなった漆

漆って、英語では「Japan」って言われるのに、実は現在、日本の漆の木は少なくなっています。今まで、漆は植林することや、育てて循環させながら資源を採ろうとすることが少なかったですね。自然に生えているものを採ってくる感じでした。

実は、山を手入れしたら、どんどん漆が少なくなっていっ^たんです。しかし、漆の需要はあるので、春慶に使う漆などは、中国から輸入しなきゃならない状況になってしまった。それを飛騨産業の経営者が憂いて、飛騨産業が持っている漆の森や山を、高山市に寄贈しました。飛騨産業も、昭和初期の頃は家具に漆を塗っていて、その頃、河合村に漆の森とか山とかを、たくさん持っておったんです。ここで採れた漆を使ってくれということで、援助の手を差し伸べたの。天生峠^{あもう}のところ、今、200本か300本くらいだけ残ってるのね。森で杉ばかり育てた結果、こういう状況になっています。昔は、広葉樹が非常に多くて豊かな森だった。でも、だんだん貧しい森になった。今は、森のあり方が昔と全然違う気がするね。

飛騨漆の森プロジェクト

HIDA Urushinomori Project

漆の森を作ろうと思ったわけ

高山には、伝統工芸で漆を使う、春慶とか屋台とかがあるけれども、今は地元で漆が採れる状況ではない。このままいくと原料がなくなる。そして、原料のないところでは技術が育たず、伝統は消えてしまう。とにかく漆の森を作って、伝統工芸を将来につないでいけるようにしたいなと思ったのが、漆の森を作ろうと思ったきっかけだね。

自生しとる漆の木は、山へ入ればあるんや、ポツポツと。でも、ものづくりに使えるほどの量は採れない。そうすると人も育たないし、伝統もつないでいけないですね。伝統文化を後世に残していくためには、やっぱり職人が生活できるように、人を育てることができる状況を作らないと、伝統文化がなくなってしまうんです。

伝統文化も、昔のままコピーしてつなげればいいっていうのではないです。常に革新しなければあかん。もともと家具メーカーで商品開発をしていたこともあって、そこにとても興味を持った。その中で、退職してからやれることって考えた時に、やっぱり資源をちゃんと残さないと、人も育たないと、新しいことへのチャレンジもできるようにしないと。

さあ、作ろう漆の森

実は、以前、漆組合が飛騨にあった時代の事業のひとつとして、漆の木を何万本も植えたこともあるの。ところが、植えたことはいいけども、急斜面に植えたので、豪雨とか豪雪とかの被害に遭って、全部流れてしまった。

それで、飛騨高山以外の漆の産地では、どういうことをやっているのかを調べてみると、里山みたいな低い身近なところに、漆の森を作っていることがわかりました。高山にも畑とか、手入れをしない里山とか、休耕畑みたいなものとかありますよね。そういうところで植えたほうが生産性もいいし、管理もしやすいし、被害に遭いにくい。さらに、ロングスパンで使わせてもらえるところだとなお良い。我々が里山で漆を育て始めたら、心ある人が自分の土地も使ってくれても良いと、何か所かの土地を無料で使わせてもらってるの。

以前は、苗を買ってきて、山の持ち主のところに預けたこともあるようです。山の持ち主が苗木を山に植えますが、管理を担当する人は誰もいなかった。山の持ち主が植えるだけです。その木がたまたま運良く育ったら、これは俺の植えた木やで、お金出せて言ってくる。でも、我々は、そういうことじゃないよなと思っていました。

今は、まず漆の実を山に行き採ってきて、種を取り出して、自分たちで撒いて苗木を作っているんです。この苗木作りが難しいんや。種のまわりに蠟成分があって、種を保護しているわけです。その蠟の部分を取ってしまわないと発芽する種ができません。そして、種から苗木にして、畑に移植します。ちゃんと水をやったり、草を取ったりしながら発芽させて、ある程度の大きさの木にします。



植樹祭

循環～漆の森プロジェクト～

長いスパンで見て、循環するのも大事だと思っていました。みんな5年後ぐらい見るのですけど、もっと長期で見てシステムを作るのが大切。森もそうだね。漆の木から樹液として漆が採取できるのは、苗木から15年後の成木になってからになる。

漆の苗木を育てる時にいろんな補助金を使っている。育てた木は、漆に関わる人たちが使えるようにしたい。最低限必要な経費だけ出せば使える仕組みを作らなきゃいけないと思っています。自分たちでちゃんと管理をしながら、資源を育てて使っていく仕組みを作らないと、循環そのものが始まらない、ということで飛騨漆の森プロジェクトを作ったの。

ある程度の運営ができるようになったので、発足2年目でNPO法人にしました。で、今、3年目か4年目。初めは任意団体だった。でも、漆の木が育つと任意団体の資産になってしまう。そうすると後で問題になるので、NPO法人にしました。そのほうが、将来、皆さんが公平に使えるし、同じ考えを持った人たちに譲っていける。漆を共通の財産にしたいという思いもあります。

現在、正会員は20人ほどです。森関係の方とか、職人さんとか、間接的に関係を持っている人たちなど、いろいろです。

主体的な活動は財産

今まで失敗した原因の一つは、補助金をもらって、どこかの組織や団体に委託をしたこと。どこかに委託をして、自分たちはお金を出す人、考える人というふうに役割を分けたことだと思います。現場の人と考える人みたいに分けるんやったら、やらんほうが良い。

この事業は、自分たちがきっちり育てて、全部、肌身で感じる。最初からそういう覚悟を持ってやるなら、成功すると思ったので、委託しませんでした。これはとても大事なことです。中間組織みたいなふうじゃなくて、自分たちが主体でやるというのがやっぱり大事で、成功の秘訣なのかなと思っています。

土地の状況を見て、こう作ろうとかさ、ここの土地ではこういうやり方にしようとかね、様々な体験をしてくると、基礎体力がものすごく強くなる。それが継続性のもとになるね。いろんな体験が財産になってくる。こうやってうまくいったよとか、失敗した時はこうだったよって知識とか経験が蓄積されていくね。今のところは、まあまあうまくいってるかな。

木を科学する

実は、根からも漆は取れる。移植をする時に、根からたくさん漆が出てきます。根や幹の部分の木材としての活用も、やるべきだと思う。とにかく、もう一度、木を科学したいなとは思っている。木そのものの見方を変えていくということもやるべきだと思っていますね。

漆の新芽は天ぷらにすると、タラの芽とか、ああいう感じでおいしいんだよ。昔は、蠟燭は貴重なものだったけど、漆の実からも蠟燭が作れたの。芽は食べれるし、実も活用できますよね。もちろん樹液は使えるし、売るしね。漆は余

飛騨漆の森プロジェクト

HIDA Urushinomori Project

すところなく使えます。漆のポテンシャルは高いね。もっと新しい使い方ができるかもしれない。まだまだ漆を活用しきれてないですね。

これから科学的に分析していくうちに、漆の新しい価値や使い方も出てくるかもしれない。そういう意味で、もう一回ちゃんと見直しをする。もしかしたら新発見がある可能性もあります。そういうことを確認しつつ、タブーを作らずに漆に関わる場所が、全国にひとつくらいあってもいいなと思ってます。

体験の大切さ

今、小学校でこどもたちが漆のことを学びたいって、先生からインタビューを受けてます。その時、先生に「俺がイメージして話しとることと実際のことは、ズレが絶対出てくる。だから、先生自身が最低限のことを経験をした上で、こどもたちに伝えないと、違ったことが伝わるよ」と言いました。何かひとつとりあえず体験して、漆はこういうふうに植えるんやとか、苗木がこんなふうなんやって体験がないと駄目なんです。人から聞くだけっていうのは抜けていくし、ズレていくんです。

とにかく、草刈りでも何でもいい、こどもたちも来て、作業に参加することが大切だね。体験した後に、漆の木の周りにあった草を持って行って話したほうが、こどもたちも理解できる。おじさんがこうやって手入れをしてくれるから、こういうふうに漆が育つんだなって。これが、伝統文化につながっていくわけですよ。そういうストーリーを、ちょっとでもいいで体験させるということが、とても大事なことだなと思っています。その場に行った空気感みたいなものとか。現地を見ることだけで、何もしなくても、そこで説明を聞いて、これが何年も経って大きくなったら、こんなふうになったとかね。



植樹祭

温故知新

高山っていうと、大学生の子たちもすぐ屋台とか、高山祭とか、目立つところばっかりに目がいく。高山の伝統文化は、屋台と高山祭しかないみたいな感覚で捉えてしまうところがあるね。そうじゃなくて、伝統文化を伝承するっていうのも、循環させるとか、新しいものを取り入れるって方法もあるもんでね。まず体験をして、何に生かすか、自分たちはどうするかってことを考えてほしい。

県とか市が取り組んできたことの良い面を勉強したり、悪い面を修正して、新しいトライアルをしていきたいですね。その時代ではすごく良かったけど、今の時代にそぐわなくてこともあります。今の時代に合う形に整えていくっていうのは大事。飛騨漆の森プロジェクトで取り組んでいる課題みたいに、材料がないって言うたら、長期的に見て、循環できるように考えて行動を起こす。いろんな経験をした人の思いが噛み合って、飛騨漆の森プロジェクトができましたね。これからは賛同される方がどんどん広がるといいですね。

伝統文化っていうのは、前の代からそのまま引き継いで、その通りにするだけじゃないと思う。伝統的な春慶塗りを大事にしつつ、新しい塗りにもチャレンジしたいですね。そして、新しい漆文化と技術を開発していきたいと思います。そういうことに興味のある我々は、どんどん新しいことに挑戦していきたいと思うね。